

マザーハウス

たより

2022

11月号

**あなたは愛されるため、また、愛するために生まれてきたのです。
あなたが必要であり、大切です。マザーハウスはあなたの家族です。**



～受刑者の皆さんへ～

♪お問合せが多い内容（例：文通相手の追加を希望したのにまだ決まっていない等）は、返信にかえてお知らせ欄で回答させて頂くことがあります。毎月ご確認頂くようお願い致します。

♪移送・出所される方は必ずご一報下さい。MLP（文通）に参加している方は文通相手へのお手紙のみ出して頂ければ大丈夫です（差出人欄の住所で確認できるため）。

- 2 理事長挨拶
- 5 社会の声
- 8 警察職員による被害者支援手記
- 18 育児日記
- 18 ささきみつおコーナー
- 20 塀の中のたより
- 21 つぶやき！
- 22 ラブリー-DAYS
- 22 回復プログラム 実践
- 23 行事予定

表紙…エイル・Nさん

理事長挨拶

皆さん、いかがお過ごしですか？今年もあと二か月で終わりです。

先日、弁護士ドットコムの取材を受け、記事が掲載されましたので、「ご紹介します」(https://www.bengo4.com/c_1009/n_15165/)。

☆

刑務所を出所したら

「浦島太郎状態」だった・・・

のべ20年という歳月を刑務所で過ごした五十嵐弘志さん(57)は2012年1月、東京・渋谷の八千公口の交番前で、身元引受

人の佐々木満男弁護士と再会して、抱き合っ
て泣いた。

寒空の下、大の男がむせび泣く姿に周囲は
啞然としたかもしれない。だが、五十嵐さん
は必ず社会復帰するという固い決意を抱いて
いた。出所から12日後のことだった。

「こんな人間は死んだほうがいい」
と思っていた

性犯罪を繰り返す性依存症の男性、刑務所
出所後すぐにインターネットカフェで女性店
員を人質にとつて個室に立てこもった男性――
。

世間が「関わりたくない」と避けがちな元
受刑者たちの声に耳を傾ける。現在、NPO
法人マザーハウスの理事長をつとめる五十嵐
さんの仕事だ。

自らも詐欺や窃盗などで、3度の服役経験
がある。1、2回目の出所後、社会で待って
いたのは、刑務所でできた「悪い仲間」たち。
再び犯罪の道に進んだ。

新たな人生を歩み直すための転機が訪れた
のは、3回目の犯罪で逮捕されたときのこと
だ。

それまで疎遠にしていた母親が留置場に面
会に訪れた。「隣近所を歩けない」と言われ
た。妹が離婚の危機に陥っていることも知っ
た。自分の犯罪によって、被害者や家族に迷
惑をかけていた事実があった。

拘置所で聖書を読んで、初めて自分の罪と
向き合った。被害者に苦しみを与えていたと
気づき、号泣すると刑務官が駆けつけた。

「こんな人間は死んだほうがいい」。そう口
にすると、刑務官は「ここで死んでもらって
は困る。落ち着け。まだ間に合うから」と言っ
た。

聖書との出会いから、キリスト教の神父や
シスターに手紙を出して、交流を持った。手
紙を受け取った一人、プロテスタント信者の
佐々木弁護士は、たびたび面会に訪れて、最
終的に身元引受人となった。

五十嵐さんは出所後、カトリックの洗礼を
受けている。

「つながり」と「帰る場所」があった

2011年12月30日、9年の刑期を終
えて、G刑務所を満期で出所した。社会に戻っ
てきた日のことは、今でも忘れない。

年月の経過とともに何もかもが変わっていた。「浦島太郎状態」ではあったが、1、2回目の出所時と違った。「つながり」と「帰る場所」があった。

向かったのは、受刑中に手紙で交流していたキリスト教信者が待つ名古屋の教会だ。初めて目にする建物やミサの様子、シスターたちの姿に思わず涙があふれ、周囲に「あなた、どうしたの?」と心配された。

夜は、教会が運営するシエルターに泊まった。元受刑者であることを話すと「そんなの関係ないよ」という言葉が返ってきた。

翌年の2012年1月11日。名古屋から東京・渋谷駅の八千公口に向かい、佐々木弁護士と再会した。交番の前で抱き合って泣いた。そのまま佐々木弁護士に同行してもらい、生活保護を申請した。

自立しようにも、パソコンも思うように使えない。ハローワークの出所者サポートを利用しようと出向いたところ、担当者に「生保を受けることを『申し訳ない』と思わないの?」と言われた。思いがけない言葉に衝撃を受けて、支援を拒否した。

日中は教会に足繁く通い続ける中で、自分のできることを考えた。

「帰る場所がない」「行く場所がない」

刑務所の中で、受刑者たちが語っていた言葉が頭をよぎった。「誰も関わりたくなくて、孤独な人」が多い受刑者や出所者のために、できることをしたい。その思いから、彼らを支援するNPOを立ち上げることを決意した。

「犯罪性のある」人間といわれて

ところが、社会は甘くはなかった。

NPOを設立するための手順や紙の印刷方法もわからずにさまざまな人に教えてもらった。8時間かけて、A4用紙1枚の書面を完成させた。

しかし、提出後に担当者からかかってきたのは「刑務所に行ったことはあるか?」との電話だった。

正直に受刑経験を伝えると、禁錮以上の刑に処せられた場合、刑期を終えてから2年を経過しないと、NPO法人の役員になれないことが法律で定められていると説明された。

やむを得ず、当初は民間非営利団体として活動し、2014年にNPO法人となった。活動内容は多岐にわたり、受刑者とボランティアの文通活動、出所者の居場所となるカフェの運営などのほか、助けを求める受刑者がいれば全国各地の刑務所にも出向く。複数の受刑者や出所者がマザーハウスにつながった。しかし、事件の内容も生い立ちも人それぞれ。再犯をしたり、トラブルを起したりする人たちの対応に頭を抱えた。研究者や実務家とともに研究会を立ち上げ、彼らとともに、何ができるかを考えた。

五十嵐さんは、マザーハウスに助けを求めてくる人たちの刑事裁判に情状証人として出廷することもある。



横須賀のコンチョさん
「天国への階段」

悔しい思いをしたことは、何度もある。ある裁判のことは、今でも覚えている。

それは、ある受刑者がマザーハウスとの手紙のやりとりを禁止され、国を相手に起こした裁判のことだった。

千葉地裁は2015年4月、手紙のやりとりを禁止する処分を取り消し、被告である国側に5000円の損害賠償を命じる判決を出したが、国側は、五十嵐さんが、法律で手紙のやりとりを禁止できる「犯罪性のある者」にあたることを主張していた。

「今」ではなく、「過去」をみていることに深く傷ついた。

「生まれつきの犯罪者はいない。絶対に負けない。見返してやる」。その気持ちで己を奮い立たせ、闘ってきた。

「しあわせになってよいのか」葛藤の日々

非難の言葉も幾度も浴びた。犯罪をおかした人が、再び社会で生きていくことの厳しさを痛感する日々が続く。

それでも、10年間、もがき苦しみながらも、社会の中で生き抜いた。

五十嵐さんは「社会の厳しさ」を感じながらも、数々の出会いに恵まれたという。支援者や研究者など、関わってくれた人たちへの感謝は尽きないと語る。

その中で「しあわせ」を感じる出来事もある。社会に戻ってきてからは、パートナーに恵まれ、4児の父親となった。家族と過ごす何気ない日常に「オレってしあわせなんだな」と感じた。同時に、脳裏をよぎったのは、被害者のことだった。

「被害者は日々生き地獄を歩んでいると思うと、しあわせになってよいのかという葛藤がありました。粉々に割れたガラスを完全に修復することができないように、被害者の心は元に戻せない。謝罪したり、お金を払ったりすれば、解決する問題ではありません」

そんな五十嵐さんの心の霧を取り除いたのは、ある被害者遺族だった。小学2年（当時）の息子を交通事故で亡くした片山徒有さんだ。

「片山さんは『自分のおかした罪は忘れないでください。絶対にしあわせになって』と言ってくれたんです。彼は、私の事件とは別の事件の被害者遺族ですが、その言葉に救われました。2度と犯罪をしない。新たな被害者を生まないために、再犯を防ぐ。そのため、できることをしようと思いためたため思いました」

「元犯罪者」であっても、彼らは同じ社会に生きる一人の人間だ。五十嵐さんは「犯罪をした人が最も悪い」と前置きしたうえで、再犯を繰り返す人たちの中には、虐待やいじめの被害者もいれば、孤独感や苦悩を抱えている人も少なくないと指摘する。

これからの10年は「対話の10年」にしたいと考えている。「当事者の声にも耳を傾けてみてほしい。社会の人たちと対話し、ともに考えたい。お互いを知ること、見えてくるものがあると思う」と語る。

☆

ヤフーニュースでこの記事が掲載されたところ、「正義」というハンドルネームの方が以下のようなメールが届きました。

「真面目に生きてきた人間からしたら、あなたのような人は絶対許せない！ヤフーニュースめちゃくちゃ不愉快になった。本当に憎い、許せない！被害者にお金を全部と慰謝料も含めて返せば？図々しいですね」

「犯した罪は絶対消えませんよ。結婚して子供がいるのも許せない！真面目に生きてきて、いっぱい納税させられ、むしり取られても犯罪おかないで、ずっと真面目に生きて

るのに結婚もできないというのに！生活は苦しくなる一方だよ。あんたみたいに詐欺や強盗しようかなと時々思う。悪党の方が幸せになる日本て本当に可笑しいよね。できれば消えてほしい！あんた反省してないよね。盗人猛々しいですね。絶対許せないよ！」

他にも厳しい内容のメールがたくさん届いており、どのような意見も真摯に受け止めるつもりです。

同時に、多くの人が生きづらさを抱え、その中でターゲットを探して、言いたいことを言って相手を傷つけることによって、少しでも自分の気持ちを紛らわせようとしているように感じます。自分の中に加害性があることを知らない人が多いと感じます。

私は自分のことを正当化するつもりはないです。自分でしたことは一生涯、背負って生きて行くつもりです。何を言われようが、「目の前の人を愛する」ことを忘れずにキリストのために生きて行きたいです。

私はキリストに出会って、「助けて下さい。私のために祈って下さい」と言えるようになりました。

皆様、マザーハウスのためにお祈りをして頂ければ幸いです。

社会の声

学生の感想

■昨年十二月、専修大学法学部「法社会学Ⅱ」での特別講義に寄せられた感想をご紹介します。



エイル・Nさん

ーつづきー

私は、将来弁護士になることを目指しています。そのため、被疑者・容疑者が、弁護士に対してどのような感情を抱いているのか知ることができたのは、大変参考になりました。

☆

刑務所や裁判は受刑者の更正と社会復帰を促すことが第一であるはずなのに、ただ刑を言い渡し、刑を受けるだけの場所になっているように感じました。

刑務所という自分とは全く関係ない場所と思っていたけれども、受刑者が刑期を終えた後の社会復帰の難しさや再犯率を考えるともっと関わりを持つべきだと思いました。犯罪は悪いことではあるけれども同じ人間として、受刑者と社会との関わり合いを大切にしていきたいです。

☆

これまで法学を学んできて、その中でも刑務所で務めを終えた人のアフターについては

いくつか聞いたことがあったが、公的機関によるアフターが実際にはあまり役に立っていないことや文通ボランティアの存在については知らなかったため驚きだった。

また、被告人から見た裁判という視点も興味深いと感じた。今日では証人の発言よりも調書に書かれている行為態様が重視されているとあったが、五十嵐さんの話の中でも「今の裁判は目の前の被告人を見ていない。犯罪行為のみを重点的に見ているが、行為のバックグラウンドを見なければ被告人や犯罪の原因等深いところまでは分からない」とあった。日本は裁判に有罪確定という状況にあるが、裁判が非常に形式的で勸善懲悪の雰囲気を作り出すことで被告人を悪だと決めつけているといったことや、予め検事に作られたストーリーに沿うような審理が行われているというのは疑問に思う。

☆

五十嵐さんの言葉で、「すべては家庭から始まっていると思う」という言葉にすごく共感をした。自分のアイデンティティの形成の基盤になり、大きな影響を及ぼすものは、やはり親の、子供に対する接し方や愛情によると私も思う。

☆

検事や検察官と被告人との意識の乖離が存在する。この状況をなくすには、この乖離に問題意識を抱いている人達が行動を起こして行くしかないと思う。

☆

再犯を防ぐためには、刑務所を出た社会での居場所を確保したり、一人一人に犯罪をしてしまった背景や生い立ちがあると思うので、個々での教育が必要だと感じました。五十嵐さんがお話していた中で、刑務所の方が楽で、社会の方が厳しいと聞き、これも再犯に繋がってしまう原因にもなってしまっていると感じました。

前科があることで生じてしまう障害はたくさんあると思います。だからこそ、刑務所以外での自分の居場所が必要で、文通を通じた交流や他者との関わりがあることは、再犯防止のきっかけになると感じました。

☆

今まで、警察の受刑者に対する更生プログラムはかなり良いものだと思っていました。しかし、お話を聞き決してそうではないことがわかりました。民間のプロフェショナルと警察組織との連携が個人的にはとても大切だと思いました。

☆

受刑者のほとんどは出所しても居所がなくなる事で逆に刑務所に居続ける。ようは寝床も食事も提供されるから。これはよく聞く話だ。

マザーハウスを立ち上げたという話をお聞きして思ったことは、端的に言うと、刑期満了した人達の支援をして社会貢献させることだと自分自身は捉えた。

出所者はもちろん犯罪を起こしているがその人達にチャンスを与える事に賛否両論はあると考えている。しかしそれを跳ね除け行動を起こすか起こさないかはすごく大事なことでありと私自身は思いました。

☆

出所者の現状を知り、再犯は当事者だけのせいとも言いきれないのかなと思います。人とのつながりを感じやすい社会になってほしいと感じます。

☆

本日のお話しを伺い、刑務所の中での文通は、再犯率を低下させる機会になると確信しました。初めは文通では何も変わらないと思っていました。しかし、犯罪をしてしまう人の家庭環境や育った環境では、人との対話が欠落していることが多い傾向にあるため、受刑者に人との温かみを感じさせることはその欠落した部分を埋めるものになると考えました。

☆

正直お話を伺うまでは、再犯をしようがするまいが、単に罪を犯す人が悪いという考えを持っていました。私は刑務所の中の人と関わることもないし、日々の生活で刑務所の中を考えたこともありませんでした。

しかし、服役している人にとって最も大切なのは社会とのつながりであり、それが再犯

防止になるということを学べました。私たちが、再犯を食い止める手になれることがわかりました。

☆

服役中の文通のやり取りが太陽のような存在だったということが印象に残りました。服役中の人にとって、文通がそんなに大きな存在だとは知りませんでした。たとえ文通の相手が、家族や友人ではなくても、社会との繋がりとという点で、なくてはならないものなのだと感じました。

出所して少しでも早く社会に馴染めるようにするために、社会と分断した生活をいかに防ぐかが重要なのだとわかりました。

以前テレビで、服役中の人のチームと地元の高校生のチームが、野球の試合をして交流していたのを見たことがあります。その時は、なんで野球をするのだろうかという疑問に思いました。

しかし、今考えてみると、スポーツを通じて塀の外の人と対等に関わることで、服役中の人の社会性を養うものであったのだと理解できました。

☆

良くも悪くも犯罪をした側の人の意見だったと思います。お話を伺って理解はできても納得できない部分もありました。日本は「加害者に優しい」と言われているように思いますが。

確かに加害者は罰を科されますが被害者は守られず放置されたままです。そのイメージがあるので加害者に寄り添うことを考えることは私にとってどうしても難しいです。

☆

刑期が長いということは、長い期間、罪について考える反省の機会を得ることになるというより、より受刑者の方々の社会復帰を困難にする原因になっている側面があることを知りました。

家族がいなかったり相談できるような人間が周りにいない状態で刑務所に入り、社会から長い間隔絶されていると、刑務所に居場所を求めるような考え方をしてしまうのは気持ちかわかるような気がしましたが、同時にとても寂しいことだと思いました。

受刑者にとって刑期を終えるまでの外部との関わりは、刑務所に入っている間はもちろ

ん、出所したあとのことを考えても大切なものだとわかりました。

☆

警察の取り調べの方法や裁判での裁判官や検察の対応で理不尽な点など、刑務所にいた方だからこそその視点でのお話を聞くことができました。

裁判や取り調べの制度は、一見するととても合理的で被告人の利益も十分に守っているかに見えますが、反対の立場から見ると欠点が見えてくるというのは、とても参考になりました。

☆

私にも家庭環境が複雑な友人がいるので、とても参考になった。いつもどんなことを言っていればいいのか分からなかったが、これからはまずは親身になって話を聞いて、そこから自分のできることを考えてみようと思った。

ーおわりー

警察職員による

被害者支援手記

【出典】

・警察庁ウェブサイト「警察職員による被害者支援手記 令和元年度版」
<https://www.npa.go.jp/higaisya/syuki/pdf/R01syuki.pdf>

【発刊にあたって】

犯罪被害者は、犯罪による直接的な被害だけでなく、その後に生じる様々な問題により精神的被害など多くの被害に苦しめられます。犯罪被害者が、こうした被害から回復し、再び平穏な生活を営めるようになるためには、様々な支援が必要です。

この冊子は、全国警察の第一線において、犯罪被害者の支援活動に当たる警察職員から寄せられた「手記」を、警察庁犯罪被害者支援室が取りまとめたものです。ここに収めた

手記には、犯罪被害者がどのような状況に置かれ、どのように苦しんでいるのかの一端が現れているほか、個々の犯罪被害者に真摯に向き合い、時には共に涙しながら、犯罪被害者の立場に立つてその様々なニーズに応えるべく努力している警察職員の姿が記されています。

この冊子が、犯罪被害の実情や犯罪被害者を支援することの重要性などについての理解の一助となることを願っております。

(令和二年二月)

☆

「アルバム」

「家族を救う青年が生きた証」

警察署勤務 警部補

「交通事故」
 それは、これまでの何気ない日常を一瞬にして地獄の底に突き落とす、私たちのごく身近にある犯罪です。

大切な家族が笑顔で「行ってきます」と言っ
 て出かけた数時間後に、体温のない冷たい身体になって帰ってくる。いくら呼んでも、何

度叫んでも、今まで当たり前のように返ってきた元気な声は聞こえない。

そんな非現実的な世界に直面している遺族に自分が警察官としてどう接していけばいいのか、正しい被害者支援とはなんだろうと、今でも正解が見つかりません。

ただ、何となく自分の中で「これも心の支援になっていたのか」と少し感じた経験がありますのでお話しさせていただきます。

あれは、空がどんよりとした雲に覆われた、底冷えのきつい朝のことでした。

交通捜査係の執務室に一本の電話が鳴り響き、「バイクと軽四の人身事故。バイクの20代男性意識なし」との通報。

私はすぐさま部下に現場急行を命じ、自らもパトカーに乗り込み現場指揮に向かいました。

現場は幹線道路で、道路上には割れたヘルメットやバイクの部品が飛び散り、躍動感を失ったスポーツタイプのバイクが無残な姿で横たわっていました。その傍らには真っ赤な血に染まったヘルメット。

既に周囲は野次馬が集まって騒然としており、軽四の運転手は、顔面蒼白のまま立ち尽くし、ストレッチャで運ばれていくバイクの青年を力なく眺めているだけでした。

その後バイクの青年は、救急救命センター医師の懸命な治療の甲斐もなく、わずか20歳の人生に幕を下ろし、両親の元から静かに逝ってしまいました。

静まりかえった病室で、真っ白いシートに身を包まれ静かに眠るように横たわる息子。その姿を呆然と見下ろす父。まだわずかに温もりがある我が子の顔を優しく撫でながら「痛かったね。はやく帰ろうね」と小さくつぶやく母の姿。

これまで何度も経験してきた、自分の職務がつくづく嫌になる光景でしたが、その度に目頭が熱くなっても、捜査員という立場上、毅然とした態度で振る舞ってきました。

でも、それは少し間違っているかもしれないと気付かせてもらったのです。

警察での交通事故処理は、被疑者の逮捕、取調べ、現場の見分など必要な捜査がどんどん進み、気付けば被害者遺族の遺族調書の作成を残すのみとなります。

それまで、当然のように「被害者の手引」を手渡し、捜査の進捗状況などを説明する家族への連絡を「被害者支援活動？」として行っていました。しかし捜査員の数も少なく、私は、被害者支援担当者でかつ捜査主任官でもある立場でしたので、遺族調書の作成に携わりました。

捜査が終結に近づいたある日、私は、被害者の両親に遺族調書作成の協力と、バイクの返還を連絡しました。その時、被害者の父親が家族の心の一端を話してくれました。

「私たちは、相手に極刑を望んでいる訳ではありません。ただ家族の光のような存在だった息子を失ったことがつらくて、悔しくて、この気持ちをどう表現していいのかわからないんです。ですからうまく話せないかも知れません。」と。

この言葉を聞いて、私の頭にある思いが過ぎりました。最愛の息子を亡くした人が相手を恨む心よりも、家族の光を失ったつらさの方が絶大なのだということが、父親の弱々しい言葉から伝わってきたのです。

その時、自分が警察官としてこの被害者家族にできることは何だろうと改めて考えさせられました。

自分は警察官で、交通事故は日常茶飯事のこと。ただその日常茶飯事の裏に、人の悲しみや苦しみがあり、そして恨みよりも自分の人生の光を失った家族がいるということを司法の場に反映させることができるのは自分しかないと思っただけです。

それならと思い、「自分はこの事故で亡くなった青年のことを何も知らない。この青年のことを知らずに、本当の遺族の心情なんて

伝えられない」と思い、無理を承知で遺族である父親に、あるお願いをしました。今思い返すと、とんでもないお願いでした。

それは、「亡くなった息子さんの幼い頃からのアルバムを見せてもらえないか」というお願いでした。

私は父親に「私は息子さんのことを何一つ知りません。ですから、息子さんがこれまでどんな人生を送って来られたのかを知った上で事情聴取させて欲しいのです。事情聴取の日、息子さんのアルバムを見せてくださいませんか」とお願いしました。

すると青年の父親は電話の向こうで少し考えた後、「持つて行きます。ぜひ見てください」と応えてくれました。これは私の思い過ごしかもしませんが、少しうれしそうな返事に聞こえました。

事情聴取の当日、署内の応接室で両親と対面しました。父の手には、真新しい風呂敷2つに包まれた古びたアルバムが5冊ありました。そのアルバムが、父親の手によって一枚一枚めくられていきます。

両親は、一枚一枚めくりながら、産湯につかる生まれたばかりの我が子、遠足に行つた時に笑顔ではしゃぐ我が子、中学の修学旅行で仲間と一緒に我が子を慈愛に満ちた顔で見られ、とても息子を失った悲しみの中にお二人とは思えないくらい、時折お互いの

顔を見つめ合いながら、そのときのことをうれしそうに話し出されたのです。

この日の事情聴取は午後から始まって、半日を要しました。しかし、両親は事情聴取を終えると私に、「アルバム、見てもらつてよかったです。あの子が亡くなって、私も家内も泣いてばかりでした。あの子の遺影はつらかったです。だから、おまわりさんがあの子のアルバムを見たいと言われた時、正直戸惑いました。でも、今日あの子の笑っている顔を見ることができました。これで少し前に進めるかも知れません。ありがとうございました」と仰つたのです。

私はこの言葉を聞いて、遺族調書の作成は、処罰意思を尋ねることはもちろんですが、被害者の心情に寄り添いながらの事情聴取も決して悪いことではなく、むしろ大切なことだと考えるようになりました。

そして、いよいよ最後に青年が運転していたバイクを返還させてもらうことになりました。既に夕刻で、雪がちらほら降り始めていました。暗い証拠品置き場からバイクを運び出しました。とても死亡事故を起こしたようには思えないくらい、損傷が少ないバイクでした。

うっすらと雪が降り積もるバイクのタンクに、お父さんはそっと手を伸ばし、「ようやっ

たな。がんばったよ」と静かに呟れました。その声がだんだん大きくなり、とうとうオートバイに跨がってタンクにしがみつき、周囲の目を憚ることなく、大声で泣かれたのです。その姿を見て、私も涙を拭うこともできず、お父さんと一緒にバイクを軽トラに積み込ませていただきました。

こうして全ての捜査を終え、遺品であるバイクをご両親の元にお返しし、警察署の駐車場から帰っていく両親とバイクを積んだ軽トラを、挙手敬礼で見送らせていただきました。

その私の姿に、お母さんが助手席の窓を開け、ずっと私の方を向いていてくれました。



出所者Tさん

それから数年経ち、偶然私は自分の母から、交通事故で息子さんを亡くしたある家族の話聞いたのです。

ある方の息子さんがバイクで亡くなり、その事故を取り扱ってくれた警察官のことが今でも忘れられず、息子のことを考える時、きまってその警察官のことを思い出すという話でした。

その警察官は、事情聴取の時に息子のアルバムを見たいと言われ、息子のことや私たち家族のことを本当に分かった上で話を聞いてくれた。息子のオートバイを取りに警察署へ行った時、私たち家族と同じように涙を流してバイクを運んでくれた。軽トラにバイクを積んで警察署から出る時に、きちんと敬礼をしていつまでも見送ってくれた姿が今でも忘れられないという話でした。

その話をされた方は、亡くなった息子さんの母親だったそうですが、事故を処理した警察署名を尋ねると、まさに私が数年前に勤務していた警察署だったのです。

私にとつては、年間数百件扱う事故のうちの1件でしたが、偶然にも私の母から、私が対応した遺族のその後や人生を一步前に進めるために役立つたことを知ることができ、うれしい思いと、その家族が今後幸せに暮らして欲しいという思いがして、自分自身の今後の職務に大きな励みになりました。

被害者支援は心の支援であり、成果が目に見えないことが殆どだと思えます。

昨今、凄惨な交通事故が頻発し、幼い命を含む尊い人命が失われ、その失われた命の数だけ悲しみに暮れる遺族が生まれている現状があります。

私も交通警察の最前線で勤務する警察官として、日々発生する交通事故の被害者やその家族に思いを寄せながら、人間味のある警察官を志していきたいと思えます。

被害者のためにできること

警察署勤務 警部補

交通事故、殺人事件、性犯罪、様々な事件による様々な被害者がいて、被害者のために警察ができることも事件や被害者の状況によつて異なる。

しかし、犯人を捕まえて事件を早期解決することは、被害者が存在する限りどんな事件であっても同じだと思う。

ある冬の夕暮れ時、私が警察署で当直勤務をしていたところ、1人の若い女性が警察署へ来訪した。

私はその女性に対し来署した用件を問いかけると、小さな声で「同棲相手の男から暴力を振るわれて逃げてきました」と答えた。更に、その女性は怯えながら「自宅には怖くて帰れません、仕事も今辞めてきました」と話した。

女性は相手の男から逃げることを職場の人に話して、職場を辞めたその足で警察署に来たという。その女性が怯えている様子や、居住地と職場を同時に捨てるという行動をとつて警察署に来ていることから、ただことではない状況だと感じた。

女性の姿が外から見えないよう場所を変えて女性から話を聞くと、日頃から暴力を振るわれる被害に遭つていて、相手の男が理由もなく激高する状況等から、相手の男の危険性が窺えた。また、被害者の体には複数のあざ等が認められ、日常的な暴力等により女性が精神的、肉体的に追い詰められて逃げてきたことを裏付けていた。

そんな中、警察署へ1本の連絡があった。被害者が直前まで勤務していた職場からだった。

電話を受けると、職場の方から相手の男から電話があった。被害者の居場所を聞かれ、来ていないと答えると、相手の男は「必ず探すから。」と言つてすぐに電話が切れたと言われた。

当然相手の男には被害者の居場所を伝えていないが、被害者が警察署に相談に行くことを職場関係者に伝えていたことで、被害者が警察署に來ていることを知って職場が連絡してきたのだ。

そして、職場の方からは「女性をよろしくお願ひします。」と一言だけ言われた。この一言は、「相手の男から必ず被害者を守ってください。」と言つ意味を表していることは明らかだった。

そして、勤務先に掛けてきた電話から相手の男は想像以上に危険な男であり、被害者はその危険性を感じて、覚悟を持って居住地と職場を捨てるという決断をして警察に來たのだと悟つた。

当然その覚悟を悟つたのは私だけではない。警察署の空気はより張り詰めたものとなり、相手の危険性から被害者に危険が及ぶことが予見されることから、私は必ず被害者を保護して絶対に危険に晒してはならないと一層気を引き締めて聴取に当たつた。

被害者に相手の男のことを聴取すると「ささいなことでカツとなって暴れる男です。相手の男は離婚歴があつて、以前離婚した際は、前妻にひどいことをしたと聞きました。」「私の実家は〇県ですが、相手の男は地元で知り合つて実家に來たことがあるので、私の実家の場所は知っています。」と答えたので、私

は「相手の男は想像以上の危険な男だ、早急に逮捕しなくてはならない。」と被害者に説明したが、被害者は「相手の男とこれ以上関わりを持ちたくないし、わざわざ実家の〇県にまでは來ないと思いますので、実家に帰ろうと思います。」「相手の男を捕まえることでまた関わるのも嫌ですし、一緒に住んでいた家にバッグや財布などの荷物もありますが、男と顔を合わせてしまふかも知れないので、その荷物はもう諦めます。」と申し立て、男を捕まえることを拒んだ。

こういつた事案に携わるといつも考える。悪いのは加害者なのに、何故いつも被害者が様々な負担を被るのか。加害者と関わりたくないから。その理由で様々なものを諦めたり失つたりするのを目の当たりにしながら何も出来ない自分の無力さを改めて感じる。

しかし、警察として被害者自身を守ることが出来るし、何より絶対にやらなくてはならない。

そして、そのためには必ず相手の男を捕まえてはならない。

いくら被害者が避難しても、相手の男が実家や勤務先に行かない保証もなく、相手の男を逮捕することが被害者を守ることに繋がりに、また警察最大の武器とも言えるからである。

私は、被害者に相手の男の危険性を説明して説得し、避難場所も確保して被害者の安全を守ることも約束した。

それでも被害者はしばらくの間届出を躊躇していたが、粘り強く状況を説明して説得した結果、被害者は指定の避難場所に避難して、警察の捜査にも協力して相手の男を逮捕することを了承した。

避難場所は、警察署と提携していたホテルがあるため、そのホテルを確保して被害者を避難させることとし、被疑者の危険性から万が一に備えて、ホテル周辺の警戒も併せて実施することを被害者に説明した。

その説明をすると、被害者は頭を下げて「本当にありがとうございます」と言つた後に初めて安堵の表情を浮かべた。そして、被害者は小さな声でこう言つた。「バッグや財布もないし、お金もなくて本当は不安だったんです。」

警察署に來てからずっと平然とした姿勢を保っていたが、一気に力が抜けた様な様子に見えた。

被害者は、その表情や雰囲気から疲弊しきつている様子は明白であり、このまま聴取を継続することは身体的・精神的に負担であると判断し、ホテルに避難させて一旦休んでから再聴取することとした。

恐怖や不安と戦いながら気を張っていたのだろう。また、警察官とは言え初対面の人に身の上話をしたり頼みごとをするのも、勇気がいる行動だったのだろう。

被害者の力が抜けて疲弊しきっている様子がそれを物語っていた。

警察は多くの事件を扱い、様々な被害者と接する機会がある。しかし、被害者側の立場で見ると、その時に頼れるのは警察だけであり、孤独や不安と戦いながら勇気を出して警察官と接している。

そのSOSのサインを汲み取って最善の対応をすることが、警察がすべきことであり被害者が求めることでもあると思う。被害者の姿を見てそんなことが頭によぎり、犯人を許せない、絶対に捕まえなければいけないという強い思いが一層強くなった。

そして、犯人逮捕に向けた早急な捜査を開始し、被害者が来署した翌日には相手の男を逮捕することができた。

犯人逮捕の後、被害者は母親と共に警察署を訪れ、今度は2人して頭を下げて感謝を述べて帰った。その表情は、昨日警察署に訪れた時とは別人の様にいい表情をしていた。

私は捜査員に成り立ての頃、上司から「捜査は水ものだ、いつ駄目になるか分からない

から今出来ることはすぐやれ。」と教わったのを今でも忘れない。

関係者の記憶が薄れてしまうかもしれない、防犯カメラ等の証拠がなくなってしまうかも知れない、犯人が証拠隠滅を図ったり、どこかへ雲隠れしてしまうかも知れない。時間が経つことで事実は明らかだと思っても、様々な要素から事件の立件が出来なくなることは少なくない。

警察しか頼れない被害者にとっては、警察に事件を立件してもらおうことが精神的な支えになっていることも少なくない。だから、被害者のためにも「今できる捜査はすぐにやる。」という気持ちは常に持っているし、これからその気持ちを忘れることはない。

警察を続けていけば、今後も様々な事件の被害者と接することがある。その時、被害者に対して警察として出来ることをするのは当然であるが、私は早期に事件解決することが被害者を守り、また被害者のためにしてあげられる最大限の心の支えであると信じて、今後捜査を続けていく。

もう、大丈夫。

警察署勤務 警部補

私が警察官を志したのは、「事件や事故で傷付いた人に自分が関わることで少しでも楽になってもらいたい」という漠然とした考えからだった。

希望がなつて警察官になれた後も、自分に何が出来るかわからないが、とにかく早く現場に駆け付け、「もう大丈夫ですよ」と被害者に伝えることで、ほんの少しでも安心してもらえたらという思いで、色んな現場に走った。

そんなある年、私は犯罪被害者支援室に配属になり、事件事故の被害者やそのご家族、ご遺族のサポートを専門とする業務について。そこで私が直面したのは「支援」担当と名乗って被害者等に会う自分がいかに無力であるかだった。

一瞬にしてそれまでの平穏な日常が一変するということとは、想像を絶するものだろう。あるご遺族は「もう、私達はそちら側には戻れない」と言った。そちら側・・・寄り添うことはできても、全てを理解することはできないのだと痛感した一言だった。

被害者支援室に配属になって数年が経過したころ、私は殺人事件の遺族の支援にあたることとなった。

被害者はまだ小学生の子ども2人を持つ母親で、事件発覚の発端は、被害者の夫からの「妻が帰ってこない」という相談だった。

夫や子どもたちは、被害者の帰りを待ちながら毎日母親にメールを送っていたという。

「ママ、今日はこんなことがあったよ」

「今頃ママもおいしいごはん食べてるかな」

その期待を踏みにじるかのように、被害者は知人によって殺害され、一週間後遺体で見された。

まず私と上司は、夫に面会し、被害者が遺体で見されたこと、私達が支援担当としてサポートすることを説明した。

夫は力なく私達にお礼を言い、親族に説明しなければならぬ自分に代わって学校へ行っている子どもたちを迎えに行つてほしいと私達に依頼した。私は了解したものの、私達からは被害者について子どもたちに何も言うことができない中で、被害者について尋ねられたらどう答えればいいのかわからぬまま、小学校に赴いた。

母親がいなくなつてから帰りを待ちわびている子どもたちの前に現れたのが私達警察官とは、どんな気持ちなのか。

子どもたちは何かを察してか、私達にきつちりと挨拶し、気丈に、しかし言葉少なく送迎用車両の後部座席で正面を向いて座つていた。

これ以上、この子たちを不安にさせてはならないのに、私には気の利いた言葉も見つからなかった。

子どもたちを親戚に預け、私と上司は遺族方で、夫とその両親、そして被害者の両親に被害者が亡くなったことを説明できる範囲で話すことになった。

この時点では、私達に話せることは限られている。それを理解して大切な家族のことなのに知りたいことも知れない遺族の心境は、どれほどつらいものだろう。

最後に私は、被害者の母親に「私達にできることがありますたら、おっしゃってください」と、公用携帯の電話番号を手渡した。母親は「はい・・」と力なく答え、皺の刻まれた両手で私の名刺を受け取った。

この手で娘を大切に育て上げたのか。でも、もうこの手で温かい娘に触れることは二度とできない。

警察署の霊安室で、先程の親族に遺体確認をしていたことになった。重く冷たい扉が開き、重い足取りでゆつくりと親族が霊安室に足を踏み入れる。

私は被害者の母親に付き添い、母親がふらついた時などに備え軽く両肩を抱いて、同じようにゆつくりと入室した。

何とも言えない無音の瞬間の後、霊安室に数々の悲鳴のような泣き声が響き渡り、私の腕には母親の体の重みが伝わった。

私はどんな言葉もかけることができず、被害者にふらつきながらも抱きつこうとする母親の肩を支えることしかできなかった。私にできたことは、ただそれだけだった。

その後、親族はご遺体とともに告別式会場へ移動することとなり、被害者の夫は、子どもたちに母の死を告げ、子どもたちと共に会場へ赴いた。

ご遺族の希望で、私達も被害者と子どもを含む親族との再会の場に同席させていただくことになった。子どもたちは、この時久しぶりに母親と会うことができたのだ。そして、私が会う子どもたちは、母親の死を知った後の子どもたちだ。どんな顔で会えばいいんだろう。それより、子どもたちは母親を前にしたとき、どうなるんだろう。

子どもたちが祖父母に付き添われながらゆつくりと棺に近づいた。

長女が母親を呼ぶ声、長男が「これ、ほんとうにママ？」と静かに父親に尋ねる声は一生忘れない。

被害者や遺族に、「大丈夫」と思えることなんてあるのだろうか。

私は、何を著った気持ちでいたのだろうか。私がこの家族にいつか「大丈夫」なんて言えるわけがない。何の力になれるんだろうか。

その後、犯人の起訴、裁判員裁判など大きな節目を迎え、裁判傍聴の付添い支援など、出来る限りご親族の負担を軽減できるように尽くした。

長女や被害者の母親からは、悩んだときにメールや電話をいただき、正解はわからないけれど、これまでの関係性の中で伝えたいと思ったことを私の言葉で私なりに一生懸命伝えました。

裁判も終わるころ、私は徐々にご親族から離れる準備を始めた。警察の支援は、相手の一生を左右するけれど、一生共にいることができず、いつか終わらなければならないことを忘れてはならない。

そして、その日はやってきた。

あれから数年、私は被害者支援室から異動することになり、ご遺族に挨拶に伺うことにした。

事前に被害者の夫に挨拶の主旨を伝えたと、日程調整してくださった。

後日、自宅に伺うと驚くほどに背の伸びた子どもたちが出迎えてくれた。その時、長女

が着ていたワンピースがとても似合っていたので、思わず私が褒めると、長女は恥ずかしそうに「これ、一番お気に入りなの」と笑ってみせた。

最愛の母の死をきっかけに出会った私を一番のお気に入り洋装で出迎えてくれた長女。このとき、私は彼女から「少しずつ頑張ってるから、大丈夫」と言われた気がした。

被害者の母親にも電話で異動を伝えたところ、後日、公用携帯にメールをいただいた。そこには、「〇〇さんがいてくれてよかった。ありがとう」という言葉があった。

同じように、被害者の母親からのメッセージにも何か大きな決意を感じたのだ。

どちらとのやり取りも、私の勝手な解釈であることはわかっている。被害者やご遺族に終わりはなく、時間が経つにつれ状況が変わり、それと共に心境も変わる。「大丈夫」になるときなんて、ないかもしれない。

ただ、私だけでなく彼女たちにとっても大きな節目だったのだと思う。今まで繋いでいた手をゆつくり離すことも、私達ができる支援、応援の一つなのかもしれない。

私は被害者やご遺族に「もう、大丈夫」と言えるような立場ではなく、ましてや「この人がいるから大丈夫」と感じてもらえるほどの人間でもない。

でも、被害者やご遺族がいつかのタイミングで、心のどこかで「前より前を向けた。大丈夫」と自ら感じてもらえるお手伝いが少しでもできれば、こんなに嬉しいことはない。無力なりに精一杯寄り添いたいと思う。



出所者Tさん

支援の輪が広がるように

警察署勤務 警部補

2016年12月、小学1年生の女の子が犠牲になる交通死亡事故が発生しました。

当時、交通指導係長だった私は、現場受理した交番勤務員の即報を傍受し、現場に急行しましたが、既に女の子は救急隊により搬送され、現場には大きな血の海が残されており、病院で死亡が確認されたという無縁が流れました。

それから1年が経過したある日、女の子のお父さんから

交通事故でわが子のような犠牲者をもう出したくない

今後の交通事故防止に活用していただきましたという申し出と多額の寄付を受けて「陽菜ちゃん基金」が若松交通安全協会に設立されました。

ご両親は、この辛く苦しい体験を若松区の交通安全大会で講演されるなど、交通事故のない若松区を実現するために精力的に活動されています。

この講話を聴いた出席者だけでなく、司会を務めた警察官も涙が止まらず司会を続けることができませんでした。

今まで元気で一緒に遊んでいた姉、小さな弟、生まれたときから慈しみその成長を日々楽しみにしてきた両親、それぞれの日常が大きく変わってしまうこと。

それを防ぐために何かができたのではないかと自分自身を責めてしまうこと。ああしてあげればよかった、こうすればよかったと悔いること。いくら考えても陽菜ちゃんもどってこないこと。

ならば私たちにできるのは何か。その苦悶から出た答えが、誰もが当事者になり得る交通事故の犠牲者を一人でも救うため、多くの人に自分の体験を伝え、身近に感じてもらうことでした。

三回忌を迎えた昨年12月、ご両親はあの血の海だった事故現場に立ち、車両の運転者や通行人一人ひとりに交通安全を呼びかけました。

そして、亡くなった陽菜ちゃんと同じ年齢の今回入学を迎える小学1年生が安全に通学できるよう、保護者が安心してわが子を学校に送りだせるよう、若松区の新1年生約850名全員に黄色い傘を贈呈することになりました。

雨が降ると、若松区の通学路は小さな黄色い花がたくさん咲いているように見えます。

傘には蛍光塗料が塗布しており、遠くからでも車からでも小さな子どもが歩いていることを認識することができます。傘の一部は透明になっていて、前方を見て安全に歩くことができます。

本年度、若松区では登下校の小学生が当事者となる交通事故は発生していません。

陽菜ちゃんのお母さんは若松区犯罪被害者支援協議会の講演で、

警察の方は、何が何だか分からない私たちに、この事故をしつかりと検証して、真相を突き止めます。安心してください。とおっしゃいました。そう言い切る、力強い言葉に、きちんと調べて下さる、任せておけば安心だ、そんな風に思ったことを記憶しています。

事故のときは近くをパトロールしていた。パトカーがたくさん駆けつけてくださいました。現場検証では、ドライブレコーダーの解析もして、なぜ事故が起きたのか説明していただきました。たくさんの方の想い、あたたかさを感じました。医者として、警察官として、救急隊員として、職務と真剣に向き合い、出来る限りのことをしてくださったのだと、ありがたいなあと思いました。

と話されています。

陽菜ちゃんのお父さんは、第三回若松子ども
の安全を守るための連絡会議で、

娘が亡くなってから二ヶ月くらい経ったあ
る日、妻がこんなことを言ってきたんです。

私たち家族はいつかは笑える。でももし、
自分やあなたが、車で誰かを轢いて、被害者
の方が亡くなったら、私たちは一生笑うこと
ができない。そう思うと加害者の方が可哀そ
う。

今回、私たちは被害者という立場になりま
したが、妻が言うように加害者の方やその家
族も悲しく辛い思いをしなければならぬ。
そう考えると加害者も被害者も出さない、交
通事故のない社会になっていくことが、みん
なの笑顔がみたいという陽菜の思いに応える
道なのかなと思う次第であります。

自分の子どもや身内だけじゃなく、地域の
子どもたちも「若松家」という大きな家族の
一員であります。

と話されています。



出所者Tさん

平成31年4月26日、若松区のひびきの
小学校で、新1年生266名が、陽菜ちゃん
基金で贈られた傘を持ち、新元号「令和」の
人文字を作りました。

それは、陽菜ちゃんのお父さん、お母さん
の思い「交通事故ゼロ（レイ・ワ）」の社会
の実現に向けたメッセージでした。

黄色い傘で描かれたメッセージは、天国の
陽菜ちゃんからもはつきり見えたに違いあり
ません。

被害者支援とは、警察官が被害者や家族に
付き添うこと、捜査状況について説明したり
関係機関を紹介すること、要望があれば対応
することであると思いがちです。

しかし、陽菜ちゃんのお父さん、お母さん
と出会い、被害者支援というのは、警察や関
係機関だけが行うものではないと気付かされ
ました。

ここに住み生活するすべての人が、相手を
思いやり、相手の立場に立って行動すること、
被害者支援とは誰もが行うことが出来ること
なのです。

陽菜ちゃんのお母さんは、昨年末には警察
本部で講演され、本年11月には飯塚市で開
催される犯罪被害者支援大会で講演されると
聞いています。

陽菜ちゃんのご両親は、

陽菜がまたこの世に生まれ変わってくると
きには今より少しでもこの世の中に笑顔があ
ふれているように、互いに助け合っていていき
たい

誰も被害者にも、加害者にもなりたくあり
ません。皆さんが交通安全への意識を高め、
交通事故のない車社会を早急に目指し、明る
く、楽しい想いが広がることを願っています。
と望まれています。

ここに若松から支援の輪が広がっていくこと
を、被害者支援に携わる者として願っていま
す。



—おわり—

出所者Tさん

五十嵐亜利沙（妻）による

育児日記

長男A君の授業参観に行ってきました。
やはりとても大人しくて、班で話し合いをする時、女子達に誘導されていました。家とは全然違うので、いっぱい我慢しているんだなと分かりました。

長女Kちゃんは、小学生になったら一人でお友達の家に行つて、お菓子とジュースを買うとのこと、今一生懸命にお手伝いをしてお小遣いを貯めています。

でも、お金のために妹のお世話をしてほしいなと話すと、お金はいらなから手伝うよと言ってくれるので、素直だなと感心しました。

次女のRちゃんは、スーパーで付録付きの本を抱えていて、私が「買わないよ」と言うと泣き出したので、そのまま抱えてバギーに乗せようとしたら、ぎゃん泣きして怒って私の顔をたたき、唾を吐かれ、こっちが泣きたかったです…。

またある日は通園前に、自動販売機でコーラを買つてと言つので断ると、ご機嫌斜めに

なって、なかなか幼稚園に入らなかつたり…そんなことが日常茶飯事で、日々頭を抱えています。

三女のMちゃんは、アンパンマンにはまり、毎日アンパンマンのアニメを観ています。
夫がMちゃんを連れて遠出した時、コンビ二に行くたびにアンパンマンチョコを離さないとのこと、同じチョコを3〜4個持ち帰ってきました。



ささきみつお コーナー

今日一日を生きる

Yesterday is history,
Tomorrow is mystery, and
Today is a gift.
That is why we call it present.

昨日はヒストリー（過去の歴史）、
明日はミステリー（未来の謎）、
今日はギフト（贈り物）である。
だから、今日をプレゼント（現在）と言つ。

この言葉は、過去、現在、未来をよく言い
当てている。

昨日はすでに過ぎ去つた。もう戻ること
できない。

明日はまだ来ていない。飛び越えることは
できない。

私たちは今日一日だけを生きるように造られている。

今日という一日は、私たちが喜び楽しむために、神が造られた日である（詩篇118篇24節）。

だから、今日という現在は、天の父から子どもたちへの贈り物（プレゼント）なのである。

親を信頼している子どもは、昨日のことは忘れ、明日のことは気にしない。ただ今日の今を喜んで楽しく生きている。

普通の子どもは一日数百回も笑っている。自分の親が子ども昨日の失敗を償い、子ども明日への準備をしていることを信じているから。

それなのに、私たち大人は、昨日の失敗に捕らわれ、明日のことを心配しながら、今日を生きている。

今日一日に苦労は十分あるが、今日だけの苦労なら、喜び楽しむことができる。でも、昨日の後悔（持越し苦労）と明日への思い煩い（取越し苦労）とを今日の苦労に加えるから、もう背負いきれなくなるのである。

だから今日という日を喜び楽しむことができず、せっかくの神の贈り物である「今日というプレゼント（現在）」を台無しにしている。

結果として、一日数回しか笑わない大人がほとんどである。

神の子どもである自分のために、天の父が、自分の昨日の失敗を赦し、自分の明日への準備をしてくれていることを信じないからである。

「20年前のことですが、それまで親切にしていた人に裏切られて、とんでもない被害を受けてしまいました」。

「あのことさえなければ、もっとまじな生活ができたはずです。返す返す残念でなりません」。

「なんとしても裁判で勝って恨みを晴らしたいのです」。

その人は加害者を訴えてもう10年以上裁判をしている。その間に加害者が死亡したため、今は相続人を相手に係争中である。

弁護士のやり方が気に入らないとして、次々に解任して、今の弁護士は7人目。

加害者を恨むあまりか、病気がちで、仕事もしないで生活保護を受けている。

また、こんな人もいた。

「自分と家族の将来のことがいつも心配なんです。いつ病気になるかわからない。いつ事故にあうかわからない……」。

「だから家内と共働きで定年まで一生けん命頑張って、生活費を節約しコツコツ貯金してきました」。

「でも、私は胃腸を悪くしてなかなか治りません。家内は鬱（うつ）で、家で寝たり起きたりの生活です。3人の子どものうち、2人は不登校、1人は事件を起こして少年院に入っています」。

「まじめに生きてきたのに、なぜこんなひどい生活なのでしょう？」。

よく聞いてみたら、この人は住宅ローンをすでに完済し、2人の預貯金は1億円以上あると言っ。

明日への不安に縛られて、今日の喜びと楽しみを犠牲にしてきたからではないだろうか。

今日一日にやるべきことは十分ある。今日やるべきことを喜んで楽しんでやれば、昨日を悔いたり、明日を心配したりする暇はない。子どものように純真に天の父を信じ、神の家族の一員として今日一日を生きることである。



塀の中のたより

受刑者からこんなお手紙が届いています

送って頂いた本を読んで

N刑 Kさん

毎月のたよりや雑誌の差し入れ有難うございます。さらに本三冊受け取りました。普段送られてくるものとは別に届いたので、はじめは誰か別の人と宛名を間違えたのかと思いました。しかし、たよりにドン・ボスコ社様から私たちに寄付して下さったとあり、有り難く読ませて頂きました。本当に有難うございます。

新約聖書の使徒言行録からヨハネの黙示録は、私には難しくて退屈でした。

でも送って頂いた本『キリストの光』を読みました。その本で、使徒言行録からヨハネ

の黙示録が書かれた時代背景や、何故これらのものが新約聖書になったのか、が分かりやすく説明してあり、とても面白かったです。初期キリスト教徒たちの、特にパウロの信仰の強さを感じました。

私は宗教が嫌いです。憎んでいると言ってもいいかも知れません。私の母は熱心なE教の信者です。私はその二世として育てられました。私の住んでいた町には二世の子どもは私だけでしたので、その暮らしは檻の中にあるようなものでした。この世は終わる、というので学校もろくに行っていないません。私は今刑務所にいますが、それは母への当てつけということも少しはあったと、今振り返れば思います。

刑務所で暮らし、マザーハウスと出会い、送って頂けたたよりや出版物を読むうちに、私の中にあつた宗教に対する憎しみも薄れてきました。私が子どもの頃に刷り込まれた聖書解釈も、だいぶ違つということが分かりました。そして、たまたまですが、聖書を読むようになりました。これは自分でも驚く変化だと思つていきます。

信仰の持つ強さに憧れると同時に、怖さもあるというのが今の気持ちです。でももう少しキリスト教について勉強したいという気持ちになつてきました。そして出所したら、教会に行つてみたいという気持ちが生まれてき

ました。それは皆様のおかげです。どうも有難うございました。

他人をゆるすことは

T刑 Sさん

最近、他人の言動について嫌悪感を感じる事がしばしばあるのに、自分でも気づいている時もあります。考えてみると、私自身も、自分の言動が他人に怒りや嫌悪を与えていることがあるのではないかと思うわけです。その反対に、他人に誠実さや優しさを感じる事があるという事は、自分も、他人に誠実さや優しさを感じさせることができているという事だと思えます。

自分の心に余裕がなければ、他人の良いところは、なかなか見つけられません。それで、他人の欠点にばかり目が向いてしまう場合があります。また、相手を信じることができた時に、同時に自分自身を信じるという、他人には奪われない自分自身の心の強さを手に入れたと感じる時もあります。

社会でも人間関係は大変やりづらい面もありますが、刑務所ではそれ以上に難しく、気の合う人、合わない人がいて大変な時もあ

りますが、どこにいても人と関わらずには生活することはできません。

私は今後、他人との付き合いにおいて、嫌な人とは必要なことしか話さないようにしようと思っっています。無理をすれば疲れるし、どうしてもイライラしてしまうので、距離を置いて生活しようと思っっています。

もう一つ、これは大切なことですが、なかなかできるものではなく難しいです。それは、他人をゆるすことは、実際のところ、相手のためではなく、自分のために憎しみや悲しみを手放す、つまり誰のためでもなく自分自身のために相手をゆるすことができるような気持ちになれば、他人との付き合いも上手いくのではないかと思うわけです。

そのように考えて生活していくと、少しでも気持ちが楽になってくるとともに、自分自身を守るのにも繋がっていくと思います。それに加えて、謙虚な心で他人の意見にも耳を傾けて、相手の立場になって、言動・態度を十分考えた上で生活を送っていく、とにかく事故を起こさないよう規律違反を守り、真面目に務めたく、決意して頑張っていくきます。



出所者Tさん

「塀の中のたより」のボリューム少なめ版です

つぶやき！

手紙のやり取りは、孤独からの解放の一つになると思っっています。私は人との付き合いが苦手です。だから人に頼られる人を見ると、羨ましく思う時があります。何故、自分は人と違つのかなと悩みます。たぶんそれは、小さい時からずっと一人だったからだと思いません。

小・中学校でひどいじめに遭い、担任からも暴力を振るわれ、そこから人との付き合いが苦手になりました。友達はおらず、地元にもあまりいたくないので、地方へ流れていききました。でもやはり、友達は歳を取っても欲しいものです。もう刑務所にだけは入りたくないです。今度こそ立ち直ってみせようと心に決めています。

「明日のことは明日が心配します。苦労はその日その日に十分あります」（マタイの福音書 六章三十四節）の、みことばは、私も大切にしています。つい先のことを心配してしまうたちなのです。

（T刑 Hさん）

☆

毎月、送って頂いているたよりと書籍を楽しみにし、普段の生活に活かしていることが受刑生活を前向きに過ごしています。

私の母が七月の暑い時に、わざわざ遠くから新幹線に乗り、面会に来てくれました。以前のたよりに私の文章が掲載されたことを喜んでくれました。

（Y刑 Tさん）

☆

私のまわりには、「出ればなんとでもなるやろ」って人ばかりで、罪や更生、社会復帰について真剣に考えている者は少ないので、塀の中のたよりや、社会の声等に励まされています。

また、たより8月号にあった、塀の「外」のたよりのコーナーは、初犯の私にとって、とても参考になりました。住民票、免許証、帰住予定地、全ての住所が違つので苦労しそうです。

（Hセンター Yさん）

五十嵐亜利沙（妻）による

ラブリーDAYS

マザーハウスの活動をしていると、時折行き詰まっている夫の様子を傍から見ている、なんでそんな大変な思いをしてまでも、この活動を続けるんだろう…という疑問が出てきます。そのことを彼に伝えると「神様がなんとかしてくれる！」といつも同じ返答が返ってきます。そこで私はいつもハッと気づかされます。



出所者Tさん

回復プログラム 実践

■「回復プログラム係」宛にお手紙で回答を送って頂ければ、スタッフや、社会のボランティアによる正直なコメントを返信させていただきます。

事務局やフランシスコ等、他の宛先との同封はせず、個別に「回復プログラム係」宛にご送付願います。

【第7回目】

・「悔い改める決意」を新たにするために…

1. 「悔い改め」という言葉を聞いて何を感じますか。
2. 「悔い改め」に関して、自分の中に矛盾感情（悔い改めたいという心情と、悔い改めたくないという心情）がありますか。
3. その矛盾感情の原因は何ですか。
4. その矛盾感情をどのように克服したら良いでしょうか。
5. 今の自分が「悔い改める」ために何が必要だと思いますか。

編集後記 by 編集局

今月号もお読み頂き、有難うございます♪

健康相談窓口 & 刑務所アート展情報は今月号お休みです。また、プリズムアート倶楽部は今後、偶数月のみの掲載となります。

さて、今回たよりを開いてみて「何か違う…」と違和感を持たれた方もいらっしゃるのではないのでしょうか？実は最近パソコンを変えたところ、今まで使っていたフォントが使えなくなりました（泣）…ということで、今月号より若干フォントが変わります！

それでは、来月号もお楽しみに！

行事予定

- ▼ 11 / 15 8:50～
山口県立大学（オンライン）にて、講義
- ▼ 11 / 17 18:00～ 通信簿研究会
- ▼ 11 / 18
カトリック東京神学院にて、小山神父と講義
- ▼ 11 / 22～25 大分県に出張
- ▼ 11 / 29 立命館大学茨木キャンパスにて、講義
- ▼ 11 / 30 立命館大学衣笠キャンパスにて、講義
- ▼ 12 / 8 東洋大学にて、講義

お知らせ

○ MLP ペア決め現状：受刑者側の希望者よりも文通ボランティアが少ないため、文通相手がいない受刑者を優先しております（現在、約40人待ち※毎月の20～40名ほどの新規入会の受刑者の分も含まれています）。文通相手の追加を希望する受刑者はお待ち下さい。

○ 冊子 NEXT は、寄贈の終了に伴い、毎月のたよりへの同封も終了となります。

○ フランシスコ事業部は、会費を全額納付された方のみのご利用となります。フランシスコ事業部を利用しない方は、会費の分納が可能です。

なお、マザーハウスに送られた切手やお金は返還できません。あらかじめ資料をよく読み、計画的に送られるよう、何卒お願い致します。

○ 下記に当てはまる場合は、事務局までお知らせ頂きたく、宜しくお願い致します。

- ・ 突然たよりが送られなくなった。
- ・ 刑期（出所日）が変更になった。

- ・ 入会申込書もしくは会費を送った後、2か月が経っても、マザーハウスから何も届かない。
- ・ 聖書（寄贈された中古のものです）の送付を希望する（送料800円分が必要です）。

○ 会費やフランシスコの費用を切手で納める場合（84円以上の切手のみ使用可）は、1枚につき現金交換手数料5円がかかります。
（例）100円切手×5枚の場合：500円－手数料5円×5枚分＝受領額475円

○ 絵画を獄中 POST シリーズへ応募する際は、その旨を都度、ご明記願います（明記無い場合には、たよりでのみ掲載となります）。

○ たよりでは、投稿文以外の普段のお手紙から抜粋して掲載することがあります（受刑者の皆さんは、入会申込書に同意欄があります）ので、「掲載してほしくない」というお手紙・絵画につきましては、都度「掲載不可」と明記して頂きたく、宜しくお願い致します。

マリアコーヒー (ルワンダ・コーヒー)



♪製造から販売まで、元受刑者が携わっております。

FAX: 03-6659-5270

メール: maria_coffee@motherhouse-jp.org (QR ↑)

価格: 粉200g または 豆200g …… 972円 (税込)

カフェドリップ10g (1回分) …… 108円 (税込)

☆継続して購入・販売してくださっている皆さま (順不同) ☆

カトリック茅ヶ崎教会/カトリック北仙台教会/カトリック所沢教会/カトリック浜松教会/カトリック東山教会/カトリック布池教会/カトリック菊名教会/カトリック中田教会/カトリック新子安教会/カトリック碑文谷教会/カトリック桃山教会 (平和環境部) /カトリック東仙台教会/カトリック春日部教会/カトリック足利教会/カトリック神田教会/カトリック太田教会/カトリック大分教会/カトリック西千葉教会/カトリック下井草教会/カトリック新潟教会/カトリック多治見教会/カトリック芦屋教会/カトリック鷺ノ宮教会/カトリック松戸教会/ドン・ボスコ社/クリスト・ロア宣教修道女会/日本カトリック神学院/聖母訪問会



☆ルワンダの祈り☆



ルワンダでは、1994年、フツ族によるツチ族の大虐殺がありました。史上稀に見る残虐な内戦によって、ルワンダの人々は心身ともに非常に深い傷を負います。

しかし内戦終了後、恨みや憎しみから、復讐が復讐を呼ぶ状況に陥りかねない中、ツチ族の人々は、復讐ではなく、和解と共生を選択しました。マリア・コーヒーは、この和解と共生の地から届けられた生豆を使用しております。

マリアの紅茶



♪オーガニックの純スリランカ産のセイロンティーです。

FAX: 03-6659-5270

メール: maria_coffee@motherhouse-jp.org (QR ↑)

価格: 50g (2g入り25袋) …… 756円 (税込)

オンラインでのご注文: <https://mariacoffee.shop/> (QR ↓)



ラウレンシオ (便利屋業)

♪元受刑者の就労支援の一環として、不用品処理、遺品整理、掃除などをさせていただきます。お見積もりは無料です。

(2020年12月より、株式会社ルツに移行しました。)

TEL: 03-6659-2110 / FAX: 03-6659-2180

メール: info@ruth-llc.co.jp

獄中 POST シリーズ

♪現在、引き継ぎ作業中のため一時的に活動を休止しております。再開次第、お知らせさせていただきます。引き続き宜しくお願い致します。

古本募金 (きしゃぼん)

♪書籍やDVDを下記にご寄付頂くと、マザーハウスに還元されます。

送り先: 〒358-0053 埼玉県入間市仏子 916

マザーハウス きしゃぼん係

(マザーハウス事務所に送らないようお願いください)

TEL: 0120-29-7000

お問合せ

いつも有難うございます。随時ボランティアの方を募集しております。

TEL: 03-6659-5260

メール: info@motherhouse-jp.org

(QR →)



ホームページ: 「NPO マザーハウス」でご検索ください。(QR ↓)



支援

☆正会員 (一口5000円/年) ☆賛助会員 (一口3000円)

☆社会復帰支援 (ご寄付) を随時募集しております。

→振込口座名: 【トクヒ】マザーハウス

郵便振替口座 … 00170-0-586722

みずほ銀行 … 新宿支店 普通口座 2376980

※ info@motherhouse-jp.org 宛に内訳をご送付願います。

☆洋服等の物資の送付先:

〒130-0024 東京都墨田区菊川 1-16-18-1F マザーハウス

(TEL: 03-6659-2110)

マザーハウスたより 22' 11月号

発行日: 2022年11月15日 発行責任者: 五十嵐 弘志
〒130-0024 墨田区菊川 1-16-18-3F NPO 法人マザーハウス



↑ 理事長 Facebook

↑ 理事長妻ブログ

↑ MLP 問合せ